

Death in a Million Living Rooms  
1951  
by Pat McGerr

目次

死の実況放送をお茶の間へ

5

訳者あとがき 234

解説 堀 燐太郎 236

## 主要登場人物

- メリッサ・コルヴェイン……………(エンタープライズ)誌の調査係  
デイヴ・ジャクソン……………ポッジが出演する番組のアナウンサー。メリッサの大学時代の同級生  
ポッジ・オニール……………コメディアン  
サラ・スコット……………通称スコッティ。ポッジの相方、元妻  
ベス……………旧姓エリザベス・コッター。ポッジの妻。スコッティの秘書  
ヴィヴィアン・チエイス……………歌手  
アル・ウエイマー……………ヴィヴィアンのマネージャー  
グレイ・デュルシュタイン……………オーケストラの指揮者  
ヴィクター・ギングリッチ……………プロデューサー  
バズ……………ディレクター  
メリル姉妹……………ダンサー。ギングリッチの友人  
リッグズ警部……………殺人捜査課の警部  
バウワース警部補……………リッグズの部下  
アップルビー巡査部長……………殺人捜査課の警官  
ジューン……………メリッサのルームメイト

## 第一章

わたしはジャーナリズム学部生だったころ、説明に役立つ逸話を好んで用いる教授がいた。教授お気に入りの逸話は、社交界の盛大な結婚式から戻ってくるなり、花婿が現われなかったので書くことがないと言った駆け出し記者の話だった。今年になって、今風の話がそれに加わったそうので、教授のクラスでは、テレビ番組の取材に行ったのに、番組の最中にスターが毒殺されてしまい、記事にするネタがないと戻ってきた女性についての話を楽しんでいるらしい。この新しい逸話は時流に乗っているだけでなく、真実でもあるという利点がある。それは、わたし自身が遭遇した出来事なのだ。

教育のために恐ろしい事例として引き合いに出されるのは仕方ないが、実は、状況を詳しく説明したら教授の意図を台無しにしてしまう。というのも、わたしの雑誌に関するかぎり、本当にネタがなかったのだ。わたしは、ある典型的なテレビ番組とその出演者に関する取材を任されたが、殺してやりたいと思うだけなら——番組を運営する側も視聴者の側も——それなりによくあることだろうが、実際の殺人となれば、ただごとではない。だから、出演者の一人が二カメの前で死んだので、うちの編集者たちの関心もなくなった。新聞社か、せめて一般雑誌の記者だったら、事情も変わっていただろう。だが、《エンタープライズ》は、何事につけ独特な視点に立つ雑誌なのだ。その取材を任された日、わたしは、ポッジ・オニールの熱烈なファンであるルームメイトに、そのことを納得させるの

に苦勞した。

「えーっ、メリッサー」彼女の憧れの人にわたしが近づけることに、大げさな祝福の言葉をこれでもかと浴びせてから、彼女は言った。「今朝から、ずいぶんと出世したんでしょね。あんたところの雑誌は、ポツジみたいな大スターとのインタビューにチビのパツとしない調査係を送り込んだりしないもの。編集長にでもなったの?」

わたしは否定した。相変わらずそのチビのパツとしない調査係には違いないが、(エンタープライズ)の観点からすれば、ポツジにはそれで充分だった。

「ふん!」彼女は、むっとした。「そりゃ、彼の視聴率は、ゴドフリーやパールほど高くないかもしれないわよ——言っとくけどね、視聴率の計算方法をあたしは重視してないの——だって、どの番組を見てたか、このあたしが電話で聞かれたことがないんだから。だけどさ、彼の視聴率が今トップじゃなくても、今に見てらっしゃい。週を追うごとに腕を上げていて、面白くなってきてるから、来年にはテレビの大物になってるわ。ポツジには、そういう大物として編集者のインタビューを受ける権利があるのよ」

そう感情的にならないでと、わたしは言った。ゴドフリーもパールも、インタビューを受ける予定はなかった。

「だけど、テレビについて丸一冊割くって言ったじゃないの。人気番組を扱わないで、どうやってそんなことができるのよ?」

そこで、わたしは説明した。(エンタープライズ)のような雑誌にとって、テレビは産業であつて娯楽ではない。編集の取り組み方は、銀行業や住宅業など、これまでに特集号を組まれるに値した産

業に対するのと変わらない。読者が関心を寄せるのは、総資本、原価、所得であつて、登場するテレビタレントではない。出版社が、テレビに重点的に取り組もうと決定すると、編集主任たちが、ワシントンやハリウッド、さらにはロンドンにまで急遽出向いた。大手のテレビ局には、共同編集者が殺到した。編集補佐が、広告代理店を隈なく当たつた。そして、二人組の編集助手がマンハッタンのバーを回つて歩き、視聴者の反応を調査した——とはいえ、その行動が、明確な任務を帯びていたのか、自主的だったのかはまったく明らかにならなかつた。

しかし、上層部は、カメラの前の出演者が、小さいながらも不可欠な要素であると確実に認識していた。そこで、包括的な特集号にするため、番組の舞台裏を探ることにしたのだ。ポッジの番組は、トップ五には入ってゐなかつたが、あとわずかでチャート入りしそうであり、生粋のテレビ番組だつた。スターの大半は、ラジオや映画、あるいはナイトクラブで名を上げ、活躍の場を移動してきたにすぎない。だが、ポッジのコメディはテレビで誕生し、テレビで育つた。だからこそ、ポッジを（エントプライズ）にうつてつけの取材対象としたのだ。

わたしに任せられたのは、自由度の高い仕事だつた。ポッジや彼の一座と話をし、どのように番組が始まり、まとめられ、成功を収めたかを探ることになつてゐた。取材を終えれば、何千語にもおよぶわたしのメモは、雑誌の裏表紙近くの一ページを埋めるに足るわずか数百語に編集されてゐたろう。だが、わたしは、それについて愚痴をこぼしはしなかつた。ポッジ・オニールの記事が、ほかと比べて重要でないと思われてゐなかつたなら、調査係にまで仕事は回つてこなかつただろうから。調査係の女性なら誰でも、そういう機会を得たいと思つたに違ひない。ポッジに会えると思つただけでワクワクするとか、図書館通いとファイリングばかりの日常業務から解放されるなんて願つてもない

ことだとか、理由はさまざまだっただろうが。わたしが、ほかの誰よりもその仕事をしたかったのは、その仕事にわたしに与えられた理由と密接に関わるきわめて個人的な理由があった。番組担当アナウンサーのデイヴ・ジャクソンが、ジャーナリズム学部生時代の同級生だと調査主任に話したところ、主任も、学閥意識は情報収集に都合だと同意してくれたのだ。主任にはもちろん言わなかったが、ジャーナリズム学部生時代から、わたしはデイヴに不満を抱いており、今度の取材が彼に仕返しをする絶好のチャンスのように思われた。

誰かに説明できるはずもない話だった。自分でも、あんなくだらないことに四年も傷つき、腹を立てているなど子どもじみてると認めざるをえなかった。当時でさえ、本当に些細なことだった。デイヴは、自分の住んでいる男子寮で開かれたパーティーにわたしを招待してくれた。女学生なら誰でもそうだろうが、わたしは有頂天になってあれこれ計画したのに、何もかもうまくいかなかった。どういうわけか、二人とも話題に窮してしまった。デイヴが、二、三人の友だちをダンスのパートナーにと連れてきてくれたが、間が持たなかった。ほとんどデイヴが、わたしの面倒を押しつけられ、二人でパティオを歩き回り、ダンスフロアの隅に腰かけて話をしようとした。あまり達成感のある夕べではなかった——それでも、曲がりなりにもつづいた。それなのに、十時を少し回ると、デイヴがいきなり言い放ったのだ。明日の朝、オールバニー行きの早い列車に乗らなければならないので、さっさと荷造りをして早く寝られるように、これから家に送っていいってもいいかと。

それだけのことで、これほど理にかなった話はなかっただろう。それでも、四年の歳月をもってしても、夜会の途中で家に送り届けられた者にしかわからない、屈辱感と挫折感を和らげられなかった。デイヴからデートに誘われ、みんなの羨望の的になっていたので、その悔しさもひとしおだった。そ

れは、彼が、たくさんの勲章を授与された退役軍人だったからだけではない。あの年、男子同級生の大半は軍役経験があり、その何人かはちよつとした英雄だった。だが、デイヴのパープルハート勲章（戦闘中または敵の攻撃の直接の結果として受けた  
名譽の負傷に対して与えられるハート形の勲章）は、ひときわ目立っていた。というのも、それが、彼の動作をあまり妨げない程度の膝関節拘縮の証だったからだ。そのせいで彼は、女学生がうっとり見とれるような足を引きずった歩き方をしていた。デイヴは、ちつともハンサムではなかった——骨張った、頬の

こけた長い顔をしていた——それでも、わたしたちは、彼のくぼんだ目を「魅力的」、鰓の張った顎を「威厳がある」と言っていた。だが、本当に興味をそそられたのは、彼の超然とした雰囲気だったのではなからうか。彼に関するかぎり、同級生とのつき合いがなく、ただ一つの目的のため——技能を習得するため——にクラスに出席し、暇さえあれば、フリーランスの執筆をしていた。どの女の子にも興味を示さなかつたので、なおさら彼にとっても興味をそそられた。

そんなわけで、学部の報道教官が、共同課題のためにわたしたちを送り出してくれた日、わたしはとても幸運だと思った。そして、課題を終えてコーヒーを飲み立ち寄った店で、デイヴが、自分の希望や計画、野心を少し打ち明けてくれたので、二人のあいだに友情が芽生えたとほんわかした気分になった。まして最後に、その夜のデートに誘ってくれたものだから、わたしは家に飛んで帰り、勝ち誇ったように同居人たちを眺めた。そして、「振られた」のがはつきり見て取れる顔でこそ帰ると、同居人たちも人間だから、いい気味だと言わんばかりの目で見返された。その学期、わたしは彼を避けた——彼が相手なので、難しくはなかった——そして、自分に言い聞かせた。いつか絶対に立場を逆転させてやる。そしたら、あらぬ希望を抱かせてから、「オールバニー行き（オールドバニー）の早い列車に乗らなければならないので」と同じくらい見え透いた言い訳をして、その希望を踏みにじってやる。

それは、心の傷を癒すためにときおり人が抱く儂い夢で、行動に移そうなどとは思ってもみなかった。それなのに、〈エンタープライズ〉のテレビ特集号の話が舞い込んだ途端、その夢が蘇り、貴重な宣伝効果を彼に提供できる立場にある有力誌の代表としてデイヴに自己紹介できるそのチャンスに飛びついた。彼をうまく誘って自分自身について話させてから、申し訳ないが、あなたの話は雑誌のいいネタにはなりそうもないと偉そうに言つてやれたら復讐できると思つたのだ。

復讐とは、メロドラマ的な言葉だ。ある種の小説で、一人の女性が一人の男性を憎んでいる、あるいはその男性に復讐する決意だと主張すれば、それは読者にとつて、その女性がその男性を心から愛しており、憎しみを口にする事で自分をごまかしているにすぎないという確固たる証拠となる。だが、わたしの場合はそうではなかった。自分をごまかしてなどいなかった。学生時代にデイヴにお熱を上げ、卒業後は二人の人生行路が交わることはなかったが、毎週のようにテレビをちらつと見ては、その思いを募らせてきたという事実を直視した。水曜の夜は人と会う約束をせず、毎週のようにテレビの前に座り、デイヴが画面に登場し、人を追い払うお馴染みの仕草をして、「よし、みんな、あまり近寄らないでくれよ。椅子をちよつと後ろに押しやるんだ。ポッジとスコッティのために、スペースをゆつたり取るんだ」とまくし立てるのを見ていた。

コマーシャルを暗唱する以外、デイヴが番組に登場するのはほとんどそれだけで、彼のオープニングは毎週同じだった。それでも、それが繰り返されるのを見るたびに、新たな気持ちの高揚を感じ、番組の放送時間に何らかの事情でアパートにいられないと、必ず妙な喪失感を覚えた。だから、怒りと期待の入り混じった精神状態で、彼にインタビューを申し込もうと受話器を上げた。すると、目論みどおりランチでもどうかと言つてくれたので、四年前にあれほどぞんざいに鼻をへし折られてしま

つたくせに、見境もなくまた同じように湧き起こる胸の高まりを感じてしまった。だが、今回は、死刑を言い渡すのはこっちよ、と心に誓っていた。

わたしの不気味な意図にもかかわらず、ランチはかなりうまくいった。「ねえ、覚えている」とか「その後、どうなったの」とか言いながら四年の溝を埋めるのは、楽しかった。わたしが携わっているのは実録タイプのジャーナリズムだが、あなたは、くだらないことを言っただけ人を笑わせているだけだと強調して、ことさら満足感を覚えた。

「テレビのお笑い番組ほど、大真面目なものはないんだぜ」彼は、きっぱり否定した。「準備中の番組を見たら、そう確信するよ」

「その言葉、引用させてもらってもいいかしら？」わたしは、小さな青いメモ帳を取り出してめくった。「思い出しに耽るのはほどほどにして、事実を手に入れないとね。そのために会っているんだから」  
「さては」彼は、わたしが構えた鉛筆を訝しげに見つめた。「鉛筆と紙は、インタビュー相手を照れくさがらせるといってピットマン教授の警告を忘れたな」

「ちゃんと覚えているわよ」わたしは、言い返した。「ノート取りは、誤って引用されるのではないかとこの被害者の恐怖心を和らげ、偉くなった気分にはせるといってガーシユタイン教授の裁定に従っているだけよ。さあ、あなた自身について何もかも教えてちょうだい」

「番組について何もかも、という意味だね」彼は訂正した。「何から話してほしい？ ポッジとスコッティが、どのようにコンビを組むようになったかという話から始める？」

「そんなことを聞いたんじゃないわ。あなた自身について知りたいの——テレビ業界に入る前と入ってからのこと。あなたの経歴は、とてもいい記事になると思うのよね」

「本気かい？」目を細めて作り笑いをするその懐かしい仕草は、いまだにわたしの心をときめかせる。「それなら、専門家の助言がいるよ。アナウンサーなど、美化された大道商人にすぎない。美化された、と誇りを持って言っているのは、もちろんわかってくれるね。そうやってメモ帳を開かれたって、ちっとも偉くなった気がしない。ほくの話なんか、〈エンタープライズ〉のわずかな紙幅にしか値しない」とわかっている」

「判断はこっちに任せたらどうなの。あなたは、記事にする価値があると信じているの」

わたしの言葉が堅苦しく聞こえたのなら、それは、自分の話の内容に対する情熱をすでに失ってしまっていたからだ。わたしが望んだところで、〈エンタープライズ〉で彼を報道するなど到底できないとわかっていたし、彼をまんまと失望させられたとしても、どれだけ満足感が得られるのだろうかと思いはじめてもいた。それでも、頑なに最後までやり通そうとした。

「トップニュースにはならないと思うけどね」彼は折れた。「最初の質問は？」

こちらのありきたりな質問に、彼は、従順に答えてくれた。彼は、ニュースライティング、つまりニュース原稿を書く側としてラジオの道に進み、レギュラーのニュースキャスターの代役として臨時にラジオに出演して特別イベントのアナウンサーになったが、その声に営業向きの資質があると思っただ人物がいたことから、コマージュのアナウンサーになったのだそうだ。彼がラジオで宣伝していた缶詰スープとジュースのメーカーが、ポッジとスコッティの番組のスポンサーになると、ラジオの仕事をつげながらではあったが、デイヴがテレビに活動の場を移行したのは必然的な流れだった。

「それで、あなたはそれを望んでいたの？」彼の話聞いてるうちに、わたしは、個人的な感情を交えないインタビューでなければならぬのを忘れてしまっていた。「もちろん、わたしには関係な

## WHERE DUN IN

殺害現場を捜せ！

堀 燐太郎（推理作家）

ボクたち読者にとって待望久しいマガール六冊目のパズラー『Death in a Million Living Rooms』が、刊行されました。

どのような内容なのか知りたくて、先にこのページを開かれたあなたにお断りしておかなければなりません。このページの「見出し」を鵜呑みにして早合点をしてはいけません。ここで本を閉じ、あらためて最初のページを開き、古きよき時代に書かれたこの推理小説をすぐに楽しむべきかもしれません。

さて、それでも、解説もどきの、このページを読み続けるあなた。

あなたといっしょに、異色の推理作家マガールと、本書以前に書かれたマガールの作品について、少し確認をしてみましょう。

パット・マガール（パトリシア・マガール）。

一九一七年十二月二十六日水曜日—一九八五年五月十一日土曜日（享年65）。

アメリカ中西部のネブラスカ州フォールズ・シティーで生まれ、地元のネブラスカ大学を卒業した

後ニューヨークのコロンビア大学でジャーナリズムを専攻し、卒業後はアメリカ道路施設協会の広報部に勤め、その後の何年かは、「建設技術」という雑誌の編集次長をしたようです。

マガールは編集のかたわら、ミュージカルやコメディの脚本を書いています。

推理小説を書くことに興味を持ったのは、ある懸賞小説の募集広告を見てからで、早速に応募したものの結果は落選でした。その体験のあと、彼女は推理小説を書くことを決意したようです。

その辺りの事情を書いているマガール本人のエッセイがありますが、後ほど紹介します。

推理小説、謎解き小説とは、一般的に最初に謎が提示され、最後に論理的に謎が明らかにされるといふ小説です。謎は内部から施錠された部屋の中の他殺死体でも、なぜその夜に限って犬は吠えなかったのかも、読者が興味をひかれる謎であればどのような謎でもよいわけです。マガールがデビューする前に、世界中の推理作家たちが数多の意外な真犯人を創出し、一見、不可能だと思える謎を案出してきました。それらの小説は、すべて、犯人、あるいは犯人を中心とした周辺の謎を提示し、その謎解きをする小説ばかりでした。つまり、世界中に、様々で色々な、種々で諸々の、不可思議な謎と謎解きの推理小説がありました。どの小説も「探偵が犯人をさがす」という推理小説でした。

ここに推理小説を入れるおおきな壺があるとして、これまでに書かれた作品を入れるとすると、すべてが壺の中に放りこんでおける話ばかりです。しかし、一九四八年にマガールが発表した推理小説は、推理小説でありながら、その壺の中には入れられない小説でした。

それは、「犯人が探偵をさがす」という話だったからです。

推理小説とは論理的に謎が明らかにされる小説ですから、探偵さがしの謎であろうと、犯人が論理

的に探偵をさがしだせば、正真正銘の推理小説となりえるわけです。古今東西のいかなる推理作家が、犯人が探偵をさがすという小説を思いついたでしょうか。マガール以前には、誰ひとりとしていませんでした。推理作家としてのマガールの存在意義が、そこにこそあります。

マガールの着想に感心するものの小説の出来栄えとしてはいまひとつ、趣向倒れだと残念がる読者もいますが、悲観することはありません。マガールの発案者としての功績にこそ意義があり、極論すれば、趣向倒れになっていたとしても、その小説を発表しただけで意義があるとボクは思うのです。そして、仮にもマガールの小説が趣向倒れだとしても後進の推理作家が「犯人が探偵をさがす」話をマガール以上に巧く書けばよいのです。それは、そして、盗用ではありません。ポーが、世界で最初に、フランスのパリ、モルグ街に新築したアパート四階を、半世紀後にコナン・ドイルがロンドン郊外のサリー州の邸宅に移築したり、その十五年後に、ルルーが再びフランスのスタンガーソン邸の黄色い部屋に改装したとしても、誰も、盗作、盗用とは言わないでしょう。

ある意味、推理小説とはそうして進歩してきたのではないのでしょうか。

さて、マガールはいかにしてそんな発想をすることができたのでしょうか。マガールは突然にそれを思いついたのではないとボクは考えています。理詰めで、そのスタイルに到達したと思うのです。

もったいをつけて、後ほど紹介すると書きましたマガール自身のエッセイを、ここで紹介します。それが掲載されているのは、一冊の赤い本です。

『Twentieth-Century Crime and Mystery Writers, Second Edition (June 1, 1985)』。

ジョン・ライリー編のこの本の表紙は洒落た装釘で、タイトルを印刷した表紙の下半分にトレンチコート姿の男がピストルとルーベを持って立っている線画がおおきく描かれています。

〔著者〕

パット・マガー

本名パトリシア・マガー。アメリカ、ネブラスカ州フォールズ・シティー生まれ。ネブラスカ大学を卒業後、コロンビア大学でジャーナリズムを専攻。アメリカ道路施設協会の広報室長、建築雑誌の副編集長を務める。1946年「被害者を捜せ！」で、推理作家としてデビュー。1950年、カソリック・プレス・アソシエーション賞受賞。52年には、エラリー・クイーンズ・ミステリー・マガジン賞を受賞している。

〔訳者〕

青柳伸子（あおやぎ・のぶこ）

青山学院大学文学部英米文学科卒業。小説からノンフィクションまで、幅広いジャンルの翻訳を手がける。主な訳書に『老首長の国——ドリス・レスリング アフリカ小説集』、『蝶たちの時代』、『原子爆弾 1938～1950年』、『ビギルド 欲望のめざめ』（いずれも作品社）、『友だち殺し』、『パーフェクト・アリバイ』、『殺しのディナーにご招待』（いずれも論創社）、『砂州にひそむワニ』（原書房）など。

し じっきょうほうそう ちゃ ま  
死の実況放送をお茶の間へ

——論創海外ミステリ 215

---

2018年9月20日 初版第1刷印刷

2018年9月30日 初版第1刷発行

著者 パット・マガー

訳者 青柳伸子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1743-9

落丁・乱丁本はお取り替えいたします